

# 針葉樹會報



復刊第25号



発行日  
1969年7月11日  
発行所  
針葉樹会社  
印刷所  
錦光社

# 針葉樹会報

復刊 第25号

編集人

東京都台東区台東  
3-20-6

平川紀男

## 「高見さんの思い出」

山田亮三

目次

次

たしか旅先の名古屋であったと思う。高見さんが亡くなられたという連絡をうけて、すぐ新幹線の時間を調べた。どうしても告別式にでたい、でなければならぬという気持で、急いで東京に帰ってきた。

高見さんと僕との間には、十

年ほどの年代のへだたりがある。高見さんにについて多くを語る資格をもつ人間ではないが、しかし忘れ難いいくつかの思い出がないではない。

その一つは、戦前昭和十六年の秋、笛吹川東沢での前田たちの遭難の折、救援本部をおいた広瀬の宿まで、高見さんと増山さんに、わざわざ来て頂いたことがある。最近では現役の遭難が出動して、手早くあと始末をす

るようであるが、当時は学校を出ればすぐ兵隊という事情もあって、先輩は口はだすが手はださぬといふのが不文律であった。それだけに二人の先輩の来訪に、恐縮もしがれで感謝もしたもので、いまだにその時の二人の姿が、僕の記憶の底にこびりついている。

### 五月の山

浅間山 大賀二郎

魚沼三山一人旅 佐藤久尚

スコットランドの山々 高橋信成

北海道ア・ラ・カルト 小野肇

現役だより 宮武幸久

沢登りの思い出 齋藤正

会務報告

編集後記

當時現役だった甘利君や山本(健)君たちと新宿の酒亭で屢々飲み、酔ったあげくの約束から、現役の涸沢合宿に参加することになった。

追悼・高見要氏

「高見さんの思い出」 山田亮三  
「高見さんのこと」 山本健一郎  
針葉樹会懇親スキー 中村雅明

(4) (3) (1)

(16) (16) (14) (13) (12) (10) (8) (5) (4) (3)

石原君と二人で澗谷の中央稜を半分登り、おそくなつて帰幕すると、甘利・山本といつた悪童連がガヤガヤ騒いでいる。高見先輩が涸沢小舎に来られたけれど、お連れが若い頗るペッピンの御婦人。あの若さではおそらく奥様であるまいというのが彼等の推測で、ウラヤマシイナという次才である。高見さんは小柄だがあのとおりの美男子だから、艶福家であつて不思議はないが、ハテそんな人を連れての山登りで、わざわざ後輩の合宿に顔を出す筈はあるまい。そう思いながら翌朝御挨拶にゆくと、何のことではない。美人には違いないが、御年配は高見さん相応のまぎれもない奥様である。吉利君たちも、いまでは年を加えて眼が肥えたろうが、当時は女性の年令さえ見わけつかぬ純情な年頃だったわけだ。

折悪しくその日は雨。高見さんも奥穂には登られなかつたよう思うが、夫婦揃つての久しづりの涸沢に、いかにも嬉しそうにされていた笑顔が、これまたいまだに忘れ難い。

されていた。その時のテーマが何であつたか  
もう忘れたが、僕のボン友であるその雑誌の  
編集長が、とにかくこの問題では高見さんが  
才一者だからと語っていたのを覚えている。

(九頁下段より続く)

されていた。その時のテーマが何であつたか  
もう忘れたが、僕のボン友であるその雑誌の  
編集長が、とにかくこの問題では高見さんが  
才一者だからと語っていたのを覚えている。

僕は経済は専門だが経営は素人で、その時  
も司会という進行係をつとめにすぎないが、  
高見さんのお話しいろいろとうかがい、そ  
の勉強ぶりに圧倒されたものである。

だがこうした思い出以上に、僕の心を打つ  
のは高見さんのお人柄である。いつか針葉樹  
会報に書かれていたように、高見さんは馬術  
部から山岳部に移られ、山岳部員としての活  
動の期間は短い。山行経歴の多きを誇るとい  
う登山者ではないが、しかしその山登りの思  
い出を、宝物のように大切にされていた方で  
はなかつたかと思う。高見さんが大病された  
あと、ほとんど耳のきこえない不自由な身で、  
針葉樹会や翁樹会に欠かさず出席される姿を  
みて、高見さんにとつての山と山仲間がどう  
いうものか、痛いほど僕の胸に伝ってきた。

（九頁下段より続く）

した茶色の道がつづいていた。降りにいい加  
減飽きたころ道は急になり、そこをガタガタ  
と駆け降りたらこんもりとした杉林に囲まれ  
た神社の裏手に出た。神社の石段に野暮った  
い格好をした一組のアベックが、ひっそりと  
腰掛けている。一時間以上も降りつづけだつ  
たので休みたかったが、そのアベックを見た  
ら何んとなくここは休む場所でないような気  
がして、わきの清水で顔を洗つただけでその  
まま歩きつづけた。神社からは水田の中の一  
本道で、水田には既に水がはってあり田植が  
まさに始まらんとするところであった。大崎  
村のバス停までは三〇分・村はちょうど祭り  
で五月晴れの空に花火が時々ポンと上がつて  
は白い煙を散らせていた。

以上

## 「高見さんのこと」

山本健一郎

先般、五十嵐さんに続いて、高見さんの計報に接し本当に淋しいおもいをした。高見さんの卒業は昭和八年、小生は三十二年と親子ほども年令がちがい、今迄にお眼にかかったことも十回あるかないかというくらいの薄いおつきあいにすぎないのだが、不思議に強く印象に残っているのは矢張り高見さんの御人徳のせいなのだろうか。

何時だったかはつきりしないが、昭和三十一年の初夏の候にひらかれた針葉樹会で、リーダーとして夏の合宿の計画を説明した小生のところへこられた高見さんは「家内と涸沢のキャンプへお邪魔させていただきますよ」と物静かな口調でおっしゃられ、奥様と折にふれお登りになった山の話を二三して又自分の席に戻られた。当時は、まだ色々な面に戦争の影響も残り学生の合宿も食糧・装備などの面をとっても不自由な面が多く、昨今のようになに会員の皆様が学生の合宿を訪問されることがなかつたので、学生にとつては大事件である。そうこうするうちに、山田亮三さんが

卒業したての石原さん、吉田さんなどと参加されるという話しもまとまり皆何となく浮き

浮きとした気分で合宿の準備にとりかかつた

比較的天気にめぐまれて、順調に合宿の日程を消化したある日、高見さんが涸沢入りをされた。薄汚れた一同の前に瀟洒な高見さんととてもお若く見えた（今でもきっとそうであ

しょう）奥様があらわれ一同騒然となつた有様など今でも眼に浮ぶ。すでに入山していた山田・石原両先輩も加わりその夜はたのしい集いが持たれた。翌朝、高見さんご夫妻は奥穂をこえて上高地へむかわれ、われわれは又穂をこえて上高地へむかわれ、われわれは又

岩登りに明け暮れる毎日となつたが、この間一年の初夏の候にひらかれた針葉樹会で、リーダーとして夏の合宿の計画を説明した小生のところへこられた高見さんは「家内と涸沢のキャンプへお邪魔させていただきますよ」と物静かな口調でおっしゃられ、奥様と折にふれお登りになった山の話を二三して又自分の席に戻られた。当時は、まだ色々な面に戦

争の影響も残り学生の合宿も食糧・装備などの面をとっても不自由な面が多く、昨今のようになに会員の皆様が学生の合宿を訪問されることがなかつたので、学生にとつては大事件である。そうこうするうちに、山田亮三さんが（当時）に籍を置く身となり、留年した中村（T）

も続いて翌年には同社に就職、さらに一年置いて城戸君と相次いで山岳部の学生が同社に入社することとなつた。もつともその後は、

城戸君の成績があまり悪かつたためか、中村

Tが会社からボーナスでもらつてアンデスへ出掛けたりしたためか、小生にはその辺の理由は良くわからないが、石川島では山岳部の岳生を採用しなくなつたようである。

話が大分脱線したけれど、高見さんとはそこの後時々一橋大学開放講座を聴講に行つた際へ出掛けたりしたためか、小生にはその辺の理由は良くわからないが、石川島では山岳部の岳生を採用しなくなつたようである。

話しをうけたまわつたことがあった。

このあと一旦上高地へおりた合宿は、南ア山田・石原バー・ティの滝谷オ三尾根ドーム登攀ぶりをつぶさにブリズムで拝見する栄を得たり、思い出多い合宿となつた。

これが縁となつてマネージャーの柴崎は、

就職の面倒まで見ていただき、石川島重工（當時）に籍を置く身となり、留年した中村（T）

倉知が、遠征の本のなかで書いていたが、年代もへだたり全く山へ一緒に登つたことが

ないにも拘らず、一寸話しただけで百年の知己のようにうちとけて一切のへだたりがなくなってしまったような方が多い。これは山登りというような行為の持つ重要な側面を解く手掛りとなる事実でもあらうが、やはりわれくの年代のような若造と高見さんとの間にも、山登りといふ共通の趣味を通じて知り合ったという強い絆によって結ばれたのであらうか、柴崎や中村Tも就職のお世話をなったという以上の何かを感じ高見さんを尊敬し、親しくおつき合い申し上げていたようであった。柴崎のよう故あって石川島を退職し、自営への途を進んで後も年に何回からお宅にお邪魔していた者もあつた。最近つくぐ思うのだが針葉樹会の財産は矢張り昔から会の歴史を刻んでこられた大先輩諸氏なので、われくにとつてかけ替えのない無形文化財たる皆様方はせいぐ山へ登つて何時までも長生きしていただきたいものである。そして本音をはけば孫さん、コンチャン、ベンチャンをはじめとして無形文化財の皆様はまだ數十年はピんくして山登りを続けられそうなご様子でもあり、これに続く人材も豊富なのでこの分では針葉樹会の前途は洋々たるものがあると思つてゐる。どうか会員の皆さんも精を出して今年も山へ登り、こんな悲しい記事は本号をもつて打ち止めにしていただきたい。

## 針葉樹会懇親スキー

中村雅明

× × ×

恒例のスキー懇親山行は、諸々の理由から、一・二月のシーズンには行なえず、春山を兼ねて三月末に行なわれました。

宿泊所は一橋山岳部になじみ深い、神城の下川又寛氏宅で、そこをベースにして、遠見尾根ツアーや八方尾根・黒沢峠でのスキーというかなり魅力ある計画でしたが、それでいてなんとなく中途半端なものだったのか、参加者は四名と少なく、淋しい山行に終つてしましました。

来年度のスキー山行は、時期・場所の選定に趣向をこらし、盛大な山行を行ないたいものです。

三月二〇日

× × ×

前夜、山本幹事長と新宿を発つ予定が、ホームからあふれんばかりのスキー客にうんざりして、国立の部屋に泊り、早朝の急行に乗つて、昼すぎ神城着、下川氏宅に落ち着いた。

夕方、山田亮三さん、加藤が到着。コタツで酒を飲みながら明日の行動を協議。スキー党の山田さん、山本さんは梅池行きを、山党へ実はわがん党の中村・加藤は爺岳行きを主張、ともに相手方の説得につとめたが、結局は年寄りには勝てず、ともかくスキーをする事で話がつき床についた。

三月二十一日

明けて二十一日早朝、目をさますと外は猛烈な吹雪。気勢をそがれてしばらくコタツにもぐりこんでいたが、せっかくスキー山行にきたのだからというので、神城スキー場へ出掛けた。山腹の小さなゲレンデなので、両先輩はものたりない様子。一方、若手二人はひざまでぐるぐるゲレンデで大奮斗。しばらく滑った後下川氏宅にもどる。雪は相変わらず降りしきつてるので、電車のとまるのを恐れ、車で大町のエコノミスト村に移動する。

三月二十二日

早朝山本さん・加藤はエコノミスト村をさり、山本さんは帰郷、加藤は八ヶ岳に向つた。小生は山田さんのお伴で、大町の平林さんと一緒に鹿島国際スキー場で一滑り（多転び）して帰郷した。

## 浅間山

大賀二郎

落葉松林の間にアスファルトの道が一直線に伸びている。アクセルを踏み込む。八十キロ、九十キロ……カーヴが近付く。タイヤを軋ませて、コーナーを抜ける。浅間が、ボカーッとフロントグラスに飛びこんで、大きくなる。小浅間を右に、なおも走ると、峰の茶屋だ。五月四日、午前七時、快晴。駐車場には車が二台、人かけもまばらだ。薰風が吹きぬけ、青い空に浅間がのんびりと、大きい。澄んだ空気に、山肌のシワさえはつきりと見え、すぐにも登れそうに思える。ビブランムをトランクから出し、身支度をする。ピッケルをどうしようか、と迷う。登路とおぼしき屋根すじからは大分はなれたあたりに、かなり大きな雪田が残っている。わざわざグリセードをやりに行くか? やはりやめよう。惜しい気持で、一度持ったピッケルを又しまう。火山観測所の左を、林の中へ歩き始める。

今朝は、さすが寝起きの悪いぼくも寝ていられないような爽やかな朝を、中之条の親戚の家で迎えた。まだ寒い位の街を一人あとにし、吾妻渓谷を川原湯・長野原とさかのぼり、羽根尾という所から南に折れて軽井沢にやってきた。長野原線の線路に這い上って写真を撮ったり、道草を喰いながら来たのに、早朝の舗装道路は一時間で峰の茶屋までの五十キロを運んでくれた。すがすがしい大気の中を、雲一つない山頂に向って歩き出すなんて、ずい分久しぶりだ。

## 五 月 の 山

ルーズな社会人山行に甘えて、こういう山の良さを忘れていたのは勿体ないことだ。御在所の時は十時だったな、その前はミミなどと取りとめもなく考えながら登っていくと、徳沢の一寸先きにあるよう、こんもりしたガレがあつて、それを越えると、トンネルから抜けたように、樹林を出外れた。這松の向うに、南アルプスが青くかすんでいる。朝食前の足もとがふらついてきたので、休もうと思つたら、たのしそうなアベック登山家がいる。休みそびれて小浅間との鞍部の一寸手前まで行ってしまった。お握りがおいしい。砂糖を少なめにした紅茶もおいしい。ハムの缶詰をあけようと思ったらやんぬるかな、缶切のがない。石やナイフでたたいてみると、これはハーケンでやらないかぎり無駄な努力であることを、過去何回も経験しているわけで、今回も例外ではなかつた。ちっぽけな缶詰が一とに憎々しく、強情に見えてくる。こいつ月口ケットのような労力に感じる。

その時、さっきのアベックさんが追い着いてきたので、缶切りを借りようかと思ったが、声をかけそびれた。二人とも学生らしいが、キスリングを手ぎわよくパッキングし、大分使い込んだビブランムとニッカーで、いかにも山慣れた風情だ。彼女の方は色白の、山やに珍しい美人である。

二十分も休んだろうか。そろそろハイカーがふえてきたので、腰をあげる。ジープなら登れそうな広い道だ。小浅間の鞍部に出たとき、後ろから屈強な青年が現われた。荷物はなく、山姿ではないが

キャラバンシューズをはいている。足早に追い抜いていった背中と腰のたくましさに、太刀討ちできない若さを感じる。

鞍部から左に折れると、一望、砂礫の大斜面だ。東前掛山の肩まで、高差九百米の、長い長い坂だ。オーステップは、二一六八米の独立標高点のある、段落までだ。そこまで道はじぐざぐに広い尾根を登り、そこから右へまき氣味に東前掛への約三百米、完全な直線になる。ゆっくりゆっくりと登る。休まずに登る。時折振り返ると、何もかもよく見える。北岳、ハツ、乗鞍などはすぐ分るが、地図がないので、すぐ足もとの霧積山塊は、どこが鼻曲山でどこが碓氷峠か、正確には分らない。くつきりと見えるくせに、分らない。草津も、どれが白根でどれが四阿か、分らない。ハムの缶詰に似たじれったさを感じる。足もとの浅間高原には、有名なオートレース場がある。これも、大体見当はつくが、見つからない。今日、日本グランプリに十数万の観衆を集めるレーサーの多くは、十年前にはこここのサーキットを爆音に包んだ二輪ライダーだったという。熔岩原の中のアスファルト道路を、小豆ほどのクルマが、キラキラと光りながらつながって走っている。鬼押出の岩窟ホールへ行くのだ。

連休の観光客は、施設へ、施設へと集まり、定められた遊歩道路を一まわりして、帰る。

風がキツい。南風だが、時折よろめくぐらい強く、寒い。手袋が欲しいほどだ。しかし、遠くを見ると、残雪の上に、あるいは砂礫の斜面に、ちろちろと陽炎が立っている。何かの拍子にふっと風が止むと、生ぬるい空気がふわりと体を包む。(かけろうに包まれたな)と思う。

ハイカーたちを次々と追い抜き、さつきの若者にも並ぶ。大分疲

れてきたらしい。スタスタと早足で行つては、バタリと立ち止まる。追いつくと又スタスタといく。素人だな、とおかしくなった。例のアベックは岩かけに上手に風をさけて休み、たのしそうに笑っていた。黒斑山の方へ継走するのかな。かつてのわが姿、となつかしい。いやほくは女房をあれだけかつぐほどには仕込めなかつた。サブザックでのハイキング以上にはならなかつた。よくやつてあるね、君たちは、と語りかけたいような、いい感じだつた。

とうとう大斜面を、休まずに登り切つてしまつた。一時間たつて右に折れ、一直線に高差三百米を肩へ登つていく。ガイドブックでは咲き乱れているはずの高山植物は、まだ冬のだろうか茶色くちじこまつてゐる。

冬山用の赤い布切れが細いしの竹の先きで、ちぎれそうに吹かれている。この広い斜面で吹雪かれたら心細いだろう。今ならガスが急に出ても左寄りに尾根に沿つて下り、雪渓にぶつかつたら寄りすぎだとすぐ分るが吹雪だつたら、一寸真剣にならざるをえないだろう。

東前掛の谷壁を登りながら、見下した山腹は、まるで砂丘だ。樹木や、岩や、陰影を作るものは何もない。雪渓の白を除いては、色彩もない。乾いた茶色、のっぺらぼうな、白みがかつた茶色だ。水脈と風成波がわずかな凹凸を作りだしているが、幾何学的な美しさにも、なつてはいない。バカでかいスケールで人を圧倒するか、といえどそれほどでもない。それにしてもこの山肌の凹凸と量感をローランブルでダイナミックに盛り上げ、純白の噴煙を浴えた田淵行男の往年の名作が思い出される。山に対する作者の愛情が感じら

れる、という当時の評だったが、その意味が今はじめて理解できる。

このしまりのない自然から、あの生命感を切り取って見せるのは、昨日や今日山を始めた人間には、一寸できないことだろう。

遠くを見ても、近景がないから、やはり散漫である。航空写真や富士山から見た景色と同じで、ただ良く見えるだけの景色というものは、高い山がいい山とは限らないように、あまり感動的ではないものだ。

ようやく東前掛の肩に乗った。旧火口の埋ったあとが、砂地に飛んできた大小の岩がまんべんなくぶちまけられている。背後は、本峰の火口丘の壁で道は再び左に曲り、池のまわりをまわるように、火口丘の頂点へ登っていく。東南に山なみが重なり合い富士が煙霧の上に高く見える。そこはもう頂上で、烈風に吹かれながら、二、三十人の人間がこちらを見ている。標柱をめがけてならかな斜面を上り切ると、北の空がぱあっとひらけた。よくみると、北アルプスがさすがに残雪を残して高くならんでいる。小春日のひる近くなので茫洋として天空と判別し難い。おそるおそる火口を覗く。那須の硫黄の匂いとはちがう、なつかしいあの臭氣。横浜の新子安の工場時代にいつも包まれていた、昭和電工の亜硫酸ガスの刺激臭。色もおなじみの、あるかなきかのうす青だ。幸い風上なので、セーターを着ても寒くて仕方ないが、ガスは吸い込まないですむ。地鳴は聞こえず、今日はよほど静かな日のような。一九五八年の十二月、

南アの塩見岳で、ふと顔を上げた瞬間、浅間が黒煙を猛然と吹き上げるのを目にしてことがある。その煙は北風に流されて佐久の方へ崩れ、しばらくすると壁のように灰が降るのが見えた。あんなことが今、起きたら、と思うと、ありえないとは思っても、いい気持は

しない。で、お鉢めぐりを試みる。十米行くと猛烈な臭気が鼻と喉を刺し、セキが出る。どうしたのか気が遠くなつて、へたりこみそうになつた。まさか、と思うが、雷鳥沢の噴煙で、死人の出たことに北へまわっていく。気が遠くなつたのは、三ピッチ二時間二十分で、千百米も登ってきて、急に立ち止つたからだつたのだろう、すぐ元気になった。反対側から見るとさつき登りついたあたりは、

丁度雪庇のようにぼろぼろの火口壁がせり出し、ハングした上に登山者が並んでいるのだ。ハングの下はヒマラヤひだのようになつていて、このひだの間から例のうす青い煙がにじみ出るよう現われ、ゆるやかに口のふちまで上り、そこで横なぐりの烈風に吹きちらかされる。火口は百米ほど下にあって、覗き込んでも、硫黄と噴出物が、ぐちゅぐちゅしているだけで、灼熱のマグマ・原始の地球の姿は、残念ながら見えなかつた。二十分ほどでお鉢めぐりを終り、大斜面をいそいそと下る。高度が下がるとたちまち汗が出る。女の子や、家族連れや、観光客スタイルや、アベックや、いろんな明かな人種が例の五百米の大斜面を登つてくる。中にはオートバイで上つてくる奴までいる。昼すぎの陽は暑く、水はないし、堅い熔岩灰に足ごしらえなしでは頂上まではこの内の何人か辿りつけるだろうか。それもいいだろう。岩窟ホールで絵ハガキを買つて連中よりは、自然の楽しみ方を知っている人たちだ。

小一時間で樹林帯に戻り、やがて、今朝とはうつて変った峰の茶屋の雜踏の中に汗をかいて待つて、ぼくのサニーが見えてきた。

# 魚沼三山一人旅

佐藤久尚

最近低調な若手O.Bをこぞって、五月の連休は大々的に合宿をやろうという計画も、参加者が余り少ないとからお流れ。山岳部O.Bが、せっかくの三連休を家でゴロ／＼している手もあるまいと急遽、日頃行つてみたいと思っていた魚沼三山への一人旅を実行した。

五月二日、夜十時、明日から三連休、おまけに天気図をみると日本は高気圧におわれ上天気が期待されるとあって上野駅は押すな／＼の大混雑。会社で九時半まで残業して上野駅へ駆けつけた時は、もうワッペンをつけ列車を待つ登山者、帰省客の列は駅の構内をはなれて公園下まで並んでいる始末。一瞬これやあ、とても乗れねえかなと思ったが、そこはすぐ悪智恵が働いた。よく見るとワッペンのちぎれたのがあっちこっちに落ちている。それを拾つて持つていたピンで胸につけ混雑にまぎれて列の途中に何食わぬ顔してもぐり込む。満員で乗りこぼれる人が多勢いるのに俺さまはゆう／＼といい席に座つてぐっすり睡眠をとつて小出駅へ。

小出駅前にたつた一軒あるスナックに入り夜明けのコーヒーとカレーライスを食い、お日さまがかなり高くなつた頃やつて来たバスで大湯まで。夏なら枝折峠までバスが行くそうだが、今はまだ雪があつて大湯までしか行かない。大湯で降りた登山者は二・三〇人。いずれも五・六人のペーティーでかなり重装備。一人者は俺だけ。登山者カードに記入して、シーズンならバスも通る埃っぽい砂利道をザックリ／＼一時間で駒の湯。

駒の湯からいよいよ駒ヶ岳への登山道になるのだが、ここで道を間違えた。越後の山は北アや南アに較べるとまだ／＼人も少ない関係で然るべき所に指導標などない。おまけにこの地方はワラビの产地とあって、やたらにワラビ採りの道がついている。駒の湯の前の吊り橋を渡つたところで左に行くべきところを、右側に立派な道がついているもんだからついそちらの方へ入つてしまつた。しばらく行つてもいつこうに高度が上がらない。そのうち、ちょっととした台地に小屋掛けがしてあり一人の山婦がワラビ採りをしているところで道は消えていた。登山道は尾根の上にあるそうで、今さら戻るのも贋だからそこから尾根を直登。最初ダケ樺、次にシタクナゲの群生と格闘すること一時間。尾根上の登山道に出た時は、手や顔はすり傷だらけの切られ与三郎。

登山道は歩き易いものの、だら／＼と長く一人歩きにはこの上もなく退屈。太陽はカン／＼と照りつけ、久し振りの重荷にザックは肩に食い込む。毛のシャツを着ているから汗はダラ／＼、喉は渴く。残雪のあるところごとに雪をかじるが喉の渇きはいつこうに治えない。体がだるく足がつり、ペースは十五分歩いて十分休み。だんだんとそのペースも逆になる。ツェルト・ビヴァークはいやだから、駒の小屋まで行こうと思うが、木の間より見える頂上はいやに遠い。小倉山の頭に着いた時には、もうすっかり歩く気がなくなつていて。日はまだかなり高いが、二ペーティーがテントを張つていたのを見て、今日はこれまでとばかりにツェルトを張つた。その晩は飯も作らずに缶詰を開けて食つただけで寝てしまつた。

翌日は、昨夜早く寝たせいで、夜明けの寒さのため三時に目が覚めてしまった。ラーメンをゆっくり作り、朝のラジオを聞きながら

明るくなるのを待つて出発。小倉山の頭から駒ヶ岳の頂上までは広いなだらかな雪の斜面。さすがに豪雪地帯の山だけあって残雪が豊富だ。そのうえ、北アなどの山と違つて五月でも残雪が真白なのがうれしい。途中、雪にすっぽり埋つた駒の小屋に寄つて、お茶を御馳走になり頂上へ。小屋から頂上までは二十分。頂上は雪のぼつてりとしたドームであった。頂上からの眺めは、近くの荒沢岳、灰叉山、平ヶ岳、それから、これから行こうとする中の岳に八海山。あとは春霞だけ。平ヶ岳は、このあたりでは一番高く、名前の通り頂上が平らな山容でなく立派な山である。聞くところによると、道もはつきりしたもののがなく、登る人もほとんどいないそうだ。いつか登つてみたい気がする。

駒ヶ岳から中の岳までの間には小ピークが六つあり、かなり長い退屈な稜線である。昨日と同じく真夏を思わせる太陽が背後から照らし、暑さと喉の渴きは昨日にも増して激しい。十二時びつたりに中の岳に着いた。ちょうど駒の小屋から四時間。四捨五入すると三十才になつたせいか、中の岳に着いた時は、これ全身疲労の塊といつた体で、頂上の笠原にひっくり返つてそのまま昼寝。一時間ほど、うとうとしたら少し調子が出て来たようで、気を取り直して八海山へ向う。中の岳の頂上からの約四〇〇メートルの雪の斜面は尻制動で豪快に下る。あつという間に中の岳は高くなる。中の岳と八海山の稜線も登り降りの激しい稜線で、鎖場が処々あつたり、両側がスッパリ切れていて緊張する場面もある。駒ヶ岳、中の岳の稜線より歩いていて退屈でないのが助かる。中の岳までは時々、人にも会つたが、中の岳を過ぎこの稜線に入つてからは、人に一人も出会わなかいのが更によい。ちょっと昼寝をしたせいか大分調子も出て来て、

あとは快調にとばした。日が暮れて一番星が出て来た頃、ピヨコタソとした顕著なピークの頂上に立つた。そこは鞍鹿峰というピークだつた。幸い今夜は風もなさうなので、どうせツエルトかぶつて星を見ながら寝るのなら鞍部よりもピークのてっぺんの方が気持ちが良かろうと、そこでツエルトをかぶつてビヴァークした。その晩は、ラジオを聞きながら星を数えながら睡つてしまつた。

翌朝、朝のしまつた雪にアイゼンをきかせて約一時間、鞍鹿峰から丸岳まではすぐだつた。ここから八海山が始まる。八海山は名前のとおり八つの峰からなつてゐるのだが、そのうち大きなものは、大日岳、不動岳、薬師岳である。いずれも特徴のある岩峰で、全部鎖がついていて登り降りは全て腕力である。大日岳などはほとんど垂直の十メートルぐらいの壁に一本鎖が下つてゐるだけで、これをたぐりよせるようにして腕力で登るのだから三十キロぐらいの荷を背負つていたら通過困難であろう。八海山は信仰の山であるだけに、各岩峰の頂には不動明王の像や石碑や梵鐘が所せましと並んでおり一種異様な景観である。今まで頂上といえ巴ケルンか指導標か遭難碑ぐらいしか見たことがなかつただけに、鎖につかり岩峰をよじ登つて、ひょっこり顔を出したら、そこに銅像、石碑、梵鐘が建つているのを見て、何か最初は薄気味悪かった。時間もまだ早いので、大日岳の頂上で大休止をとつた。もう最後なので越後の山の景色をじっくりと眺め直した。今まで大事にしまつておいたミカンの缶詰も開けた。それからおもむろに下山にかかつた。降りは、千本檜から大崎口への下山道をとる。高度約六〇〇メートルぐらいのところまで残雪があり、そこから下は奥多摩あたりを思わせるのんびりといのが更によい。

## 「スコットランドの山々」

高橋信成

アメリカのミシガンでは、イギリスにいた七つか八つの山に登る計画であった。しかし結果的には、牛や羊の流行病や吹雪のためにスコットランドの山三つを登頂したに過ぎなかつた。ケアンゴーム山塊のケアンゴーム山、イギリスで一番高いベンネビス山（と）いっても千三百余メートルしかない。それからアロハ・アルプスのベンナーネイン山である。

ケアンゴーム山に登った時の日記を読みなおしてみると再びそのときのスコットランドの山々がよみがえってくる。

昭和四二年十二月五日にグラスゴーから11時20分の夜行でスコットランドのアヴィモアに向つた。翌六日朝にアヴィモアにつくはずだった。しかし一等の汽車の中で気持よくねむつてしまつて終点のインバーネスまでいたしまつた。朝の五時、いそいでいる旅ではないので「まあいいや」といながらアヴィモア方面の汽車の時間みると八時二十分。三時間もまたなければならない。時間がある

ので暗い町の中をちょっと歩く。ロンドンで買った新しい山靴はなれないでの靴づれができてしまつて右足をひきずりながらザックをかついで町の中をあるき入江までいき再び駅に到着した。他にまだだれも歩いている人はいない。突然警察の車が私の近くでとまって「どこからきたのだね」「日本からです」「だいぶ疲れているようだがどうしたんだ」「新しい靴がよく合わないので。駅へもどり、アヴィモアへいって山に登るつもりです。」「そうか。」

アヴィモアについたのはインヴァーネスから一時間位してからであった。駅の近くの売店で「ロッホ・モーリックへいくバスはどこからでですか」ときくと「冬はバスはない。歩かなければならない」がっくりだが、歩くことにきめた。七マイルの道だ。どうせ今日はロッホ・モーリック泊りだと思ってい歩くことでたいして落胆もしない。鉄道の下をくぐり南側に出てちょっと進むと橋がある。橋の横はスキースクールの申込所になつてゐる。その橋を渡つて二、三分歩くとうしろからきだ。車が私の前でとまって「どこまでいくのだ」名ばかりの初心者にスキーを教えていた。BCのカメラマンは、この様子をカメラに納めた。私はお札をいって登りはじめる。ここ

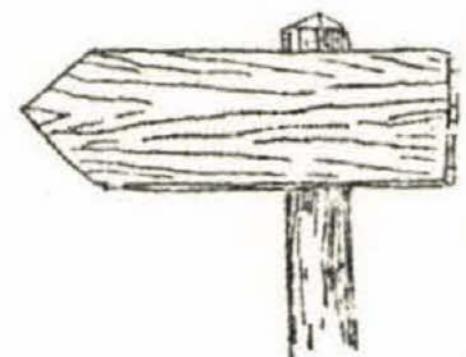
おかげで今日ケアンゴーム山に登れる可能性がてきた。天気がちょっと気になるが、この辺はまずまずの感じであった。ロッホ・モーリックにはすぐついた。自動車はそれを右に、私はそれを左にいく。湖にそつた道をひとり進む。途中左手に山荘がある。その前にちょっと休みパンにジャムを塗つて食べたり写真のフィルムを入れ替えたりしてさらに進む。すると私の前を通り過ぎた車が五十メートル程前方でとまり一人の男が出てきて私の写真をとっている。私が歩いていくのを二、三十秒とつた。「ケアンゴームにいくところです」「私もいくところだ。車にのりますか」「ええ」ということで再び車に便乗できた。彼はB.B.Cのカメラマンということで彼の車の前方をはしる車をカメラにおさめたりまわりの雪景色をとつたりしていた。もしかしたら私の姿もイギリスのテレビにてたのか知らない。坂道をのぼりきるとひらけた谷間のスキー場がある。ホワイト・レディーと間のスキー場がある。ホワイト・レディーともらう。雪はまだ少ないがスキー教師が二十名ばかりの初心者にスキーを教えていた。BCのカメラマンは、この様子をカメラに納めた。私はお札をいって登りはじめる。ここ

までくるともう山の中という感じがする。数  
本のスキー・リフトがみえるが動いているのは  
まだ二つ位である。11時頃から登り始めた。  
リフトの左側の這い松の上を雪をふみながら  
前進する。雪が這い松をうずめて道はあつて  
なきが如し。マイペースで歩みを進めた。途  
中でふりかえってロッホ・モーリックの写真  
をとった。頂上の方はガスっているようだが  
この辺はまだそうでもない。上の方は悪そう  
なので頂上までいけるかどうか心配である。  
風も登るにつれて強くなってきた。一時間位  
でリフトの上の駅につき、その小屋の中に入  
った。外は風も強く視界もきかない。頂上な  
どはどうちの方向か全然わからぬ。リフト  
も動いていないのでここで天気のよくなるの  
を待つことにする。二人の若い男がリフトの  
ワイヤーの修理だか手入れだかをしている。  
もしかしたら今からこのリフトを動かすかも  
知れないという。でもその日はついに動かさ  
なかつた。風が強すぎる。私はセーターをき  
たりチョコレートを食べたりしてまつている  
がいつこうに天氣は良くならぬ。あきらめ  
ておりようか……。頂上はここから三十分位  
のところだといふ。頂上はここから三十分位  
のかえすのは残念である。あと三十分のところで引

ツケルをザックにつけた若い男が入ってきた  
二十才前後とみえる。中に入ってきたザック  
をおき、ヤツケをきたり、レーズンを食べた  
りはじめた。ザックはビヴァークのできる  
ようなダブルのザックで、シュラフをもち、  
コンパスをぶらさげ、地図をもち、装備は充  
分とみえた。アイゼンはもっていないうだ  
会話をしているうちに彼はこの山は何回か登  
ったことがあり道をよく知っているというこ  
とがわかった。そこで二人でいくことになっ  
た。背が高く、ヤツケを着、目出帽をかぶっ  
ている彼の姿は立派な山男である。右の谷間  
からものすごい風がふいてくるのでながら目  
を開いていることができない。ときどき立ち  
どまつて風を背に受けて休む。あとで知った  
が彼の名はプレンダン。オブライエンという  
プレンダンはこの風がなんともいえなく楽し  
いという。私も同感であった。一年間経験で  
きなかつたのはこの風である。プレンダンのま  
つ毛やまゆげは吹雪で白くなつた。自分のま  
ゆげにも同様雪がついた。ほほも冷めたくな  
つた。しかしこの風だ。この雪を含んだ冷い  
風こそ山にきて命をとりもどしたような感じ  
を抱く最大のものだ。方向はよくわからない  
が風の方向と山の傾斜に注意して上に進む。

上の方にいくと小さなケルンがあった。ブレンダンと私はあとになり先になり登った。小さなケルンは一つだけかと思うと十メートルか十五メートル先にある。よくみるとその先にあるようだがはつきりしない。視界はその程度である。とてもまわりの他の山を見ることがなどできない。五つか六つのケルンをたどっていくとついに一段と大きなケルンがある。ブレンダンが「頂上だ」という。ついに到着した。ブレンダンと握手をかわした。「これがイギリスで初めて登った山だ。」と。いうとそれではもう一度ということで再び握手。この吹雪では写真もとれない。リフトの終点を一時十分前に出て頂上は一時十分過であつた。夏ならばどうということもない山であるが冬はとても危険である。毎年何人かの人気がこの山で命を落しているといふ。ちよつといつてみようということで登つているうちに天気が悪くなり方向を失ない遭難するケースが非常に多い。われわれは頂上ではたいした時を過ぎず帰途についた。この吹雪では何も見えない。

イはここまでもぐる」といって胸の辺を指した。彼もベンマクドウイに登る予定だつたがあきらめた。再び同じ道を下る。ケルンが唯一のたよりだ。登りには上の部分の五つか六つのケルンしか気がつかなかつたが下りにケルンをたどつていくといつまでたつてもケルンがなくならぬ。おかしいなこんな筈ではなかつたがと思うがいざれにしてもこれは下りの道であるからとケルンに従う。ドンドン下るとリフトの終点についた。なんのことはないケルンはリフトの終点から頂上までずっと続いていたわけだ。こんなことなら登りもこれをたどつていけば楽にいけたのにと思つたがいざれにしても頂上は登つたのだからと下りはじめた。夜はブレンダルの兄とともに三人で「ケアンゴームハウス」に宿を定めた（ベンネビス、アロハ・アルバスについては今回省略します。）



色めきだつ。街角には、草花の苗や植木に人がむらがる。しかしそうだストーブは取り外せず、今年は、六月になつてもストーブをたいてゐる。

春スキーは、もっぱらゴンドラが二基もついた旭岳のふもと湧駒別である。セーターや

雪がとけだすのを春の訪れとするならば、春は意外な早さでやってくる。泥だらけの早春は、みにくく一面をもちらながらも半年もの白の世界から種々の色を再現してくれる。重いオーバーをぬぎ、スプリングコートにきかえる気持は、なんともいえない。そして雪が近郊の山々にしか残らなくなると、スプリングもぬいで上衣だけとなる。女性もひざ下までの長いブーツをぬぎハイヒールをはきだすミニスカートがまぶしいのもこの頃である。

札幌で二年、旭川で二年と私の北海道での生活もはや四年もたち、五年目をむかえようとしている。北海道の四季の移り変りを旭川を中心にしていろいろ述べてみよう。

北海道ア・ラ・カルト

小野筆

スポーツシャツ姿でザラメ雪をすべるのも春ならではである。

ストーブを外そりかどうしようかと思つて  
いる内に、七月になり夏山のシーズンに入る  
手頃な大雪山連峰、最近噴煙をあげている十  
勝岳を主峰にもつ十勝岳連峰、でも地元の人  
は、下りを歩くなんてと夏山を行きたがらない。  
海のみえる斜里岳、暑寒別岳、利尻岳など  
絶好な山々がある。

休暇と同僚の面で恵まれないといけないのが日高連峰、旭川にいると交通の便の悪いこともあいまってまだいっていられない。在学時代半場岳兄達と登った「ボロシリ岳」がなつかしい。八月に一・二回、海にいくと夏も終りである。旭川からは、「留萌」という日本海側の海水浴場に行く。「雄冬」という所は、舟しかいけぬ陸の孤島であるがそこまでいくと本当に静かな夏の休暇が楽しめる。

秋

かさこそと落葉をかきわけての芦別岳旧道、  
ニセイカウシユツペ岳も面白い。

てストップをつけだす。とにかく北海道では、多少あつたかくともストップをもやして室内

を25度以上にしておかないと寒いとみんないう。

近郊の温泉地の天人峡、愛山溪、白金温泉などに、酒もちこみで一泊旅行するのも樂しみの一つ。そして静かに雪のおとずれをまつていてる。一昨年は、十月に雪が降り、初スキーリーを旭岳のふもとで滑った経験があった。

### 冬

私の好きな季節は、なんといつても白一色の冬である。十月末から十一月にかけて、降ってはとけ、降ってはとけしている内に、急激な寒波が旭川をおおう。

二重窓の外側にピニールをはり、雪ハネ用のスコップを購入してじっとまつていると、もうサンザと降る冬将軍がやって来る。零下20度を下ることが連日続くと冬も最高潮、鼻の水を凍らせ、耳をまつ赤にして通勤する。まづげが凍ることもある。でも私は、冬山を思いだしては、ほくそえんている。

雪が雨のように降り一日に30~40cmもつもると家庭生活に支障がおきる。朝出勤時にドアが雪のためあかず苦労したこともあり、帰宅すると雪カキを小一時間しないとドアが開きない日々も続く。屋根から夜ズドンと雪がおちておどろくのもこの頃、ツララを落し

ておかないと窓ガラスがわれてしまう。

ストームをガンガンもやして、雪の降るさ

まを窓越しにながめウイスキーをのむ。そし

て日曜日になると喜びいさんで旭岳にでか

ける。腰までの新雪に直滑降したり、転び転

びすべったり、猛吹雪の中をいける所までと

キュッキュッとシールをきしませて登行し、

エイヤーと耳をまつかにして滑り下る。そし

て一風呂温泉で浴びて六時~七時頃に帰宅する。

そんな週末をすごしている内に三月をむか

える。

旭川方面では、旭岳のほか、ゲレンデもある北の峰、十勝の森林限界をトラバースする白金コースなどがあり、ニセコまで足をのばす以外は、日帰りか一泊二日で十分スキーができる。

旭川より手頃。日帰りで十分なコースが多い。札幌におられる宮本先輩は、さぞ楽しい週末を送っていることだろう……。

(以上)

### 現役だより

宮武幸久（山岳部四年）

六月の声を聞けばOB諸氏の間ではボーナス期である。タンマリ入った懐を狙って襲いかかるわけでもないだろうが、針葉樹会の方では会費の納入期もある。そこで徴収に一役を買っているのが我々学生である。

先日都心から遠く離れた国立に下宿してい

る下級生から僕のところに電話があった。

「先輩の處に会費を集めに行つたところ、詐

欺師じゃないか、主将から紹介の電話をもらつてくれ」というのがその内容だった。あいつ、ノコノコ出掛けていったんだろうと思つたが「ひでえ、OBもいるもんだな、おそらく金がなかつたんだろう、冗談だよ」と慰めその時は笑い話に終つた。しかしそく考へてみるとやはりひどい話だ。よもや二千円の詐欺も考えられないが、不可能でないばかりが、いとも簡単なことだ。

OBと学生の関係を支えているものは信頼関係以外にないものだろう。それならこの事件はどういうことになるのか。それもこれも去年の遭難事件以来、OB学生間のコミュニケーション不足がいわれているが、その一

端が現われたのではないか。（もちろん、山岳部の登山活動は学生自体のものであつて、Bに頼るつもりは毛頭ないが）

そこでこの紙面を借りて、部員の紹介をさせて頂くのも意義あることだと思う。

現在、部員総数十一名で、その構成は、四年二人（中一人は、身体の調子悪く登山活動からは遠ざかっている又彼は最下、就職運動に奔走中）、三年一人、二年四人、一年三人とピラミッド型である。けつして弱音を吐くわけではないが、OB諸氏の間で最近のリーダーシップについて嘆かれるむきもあるが、

この量が質に？転化する面もあることを御考慮下され。

最初紹介にあたつて四年二人と書いてしまつたので、しかたなく学部年次で後を続けたのだが、これを山岳部年令で書き直すと、もつと複雑な型となる。つまり、五年一人、四年一人、三年四人、二年ゼロ、一年五人なのである。成り余れる部分とそうでない部分が出来上るのである。

穴のあいた部分を埋めようとする男性心理からか？三年四人のうち三人までが未だ前期に居すわっている。実際に山岳部思いの奴らである。今だに山岳部に残っている話だが、先

輩のY氏がA氏を紹介するのに、A氏はY氏にとつて、先輩であり同輩であり後輩である。そなたが、彼らもそうなりはしないかと期待しているところである。

心配していた新入部員であるが、五〇〇枚刷った勧誘状のおかげでもないだろうが、五年になつた。去年ゼロなのだから、無限大の増加率である。そんな無意味なことを言つて喜んでいてもしかたないが、みんなやる気のある奴らで、少ない上級生で難かしい問題にぶつかることもある。

最近この新入部員五人の間でおもしろい事がもち上つた。先にも紹介した様に五人のうち学部二年が二人で残りが学部一年なのだが、その一年の言動がおかしいのである。單的にいえば、学部一年生が二年生に対して、「さん」づけをしないのである。見かねて一人に向い正したところ「さんには敬称の意味があり、

なお、今夏合宿は七月下旬から八月中旬にかけて剣岳周辺を計画しています。OB諸氏の参加を期待しています。

## 沢登りの思い出

斎藤 正

うつとうしい今の天気も、やがて稻妻のとどろきと共に去り、一挙に夏らしい空となる。強いスカットした夏山のことを想像して、じつと我慢している今の気分が心ずしもイヤなものとばかり言えないのは考えてみれば不思議なものである。学生時代、既に学校も休暇に入り、アルバイトをするでなし、といつてももちろん落着いて机に向うでもなく、何とな

いけないし、一橋山岳部は人間集団なのだからその事をいい機会にしてメンバーシップについて考えながらこれから活動を続けるよううにと彼に言っておいた。

少ない部員で、いかに活動していくかは、これからじっくり見守って頂きたい。

実質面を抜きにしての形式面だけの話ではこれ以上下らないことはないが、山岳部内では又OBとの間ではある一定の規準だけでつながっていない人間関係があるし、それを崩しあたくないと思うのである。

く部室に出かけては時間をつぶしながら夏山の入山日を待つあの妙に落着かない雰囲気が思い出される。

谷にわけ入つて、しぶきに濡れながら静かな谷の溯行を楽しむのは夏山の味しみの一つであるが、どういうわけか学生時代には沢登りの機会に恵まれず、四年間でせいぜい数度の経験しかしていない。しかし笠ヶ岳から打込谷を下つて金木戸川を溯つた山行、柳又谷を目指して黒雉川に入ったものの台風で断念を余儀なくされた山行、前期合宿の延長で戸台川本谷を溯つた山行などいずれも通常では味わえない心よい緊張とリズム、喜びを得た山行であった。

とりわけ私にとって忘れられないのは、戸  
台川本谷を溯った時のことである。

さんざん生意氣な毒舌を吐いて上級生とや  
り合った後、前期合宿に出かけ、縦走も終つ  
てホツとして北沢で解散してから私は岡田と  
予定通り戸台川本谷に出かけた。丹溪山荘で  
例のヒットラーに似たオヤジの注意を神妙に  
聞いて沢に向つた。七条の滝の雄大な景観を  
しばし楽しんだ後本谷に入ると早くも小滝の  
連続となる。始めの二つを難なくすぎると、  
右手に深い入り組んだ谷が見える。駒津沢で  
ある。この辺になるとかすかに駒の本峰が仰  
げるだけで、どの谷がどうなつているのかわ  
からない。とにかく「左へ行け」とヒトラー  
に教えられたので左に溯ると成程まぎれもな

く本谷へ出た。この辺りになると傾斜は急で相当緊張する。やがて二段になつたナメ滝が現われ、右手は木をつかみ、左手でナメの脇をブッシュするような格好で登りはじめた。どうにか中段まで出て、上段の小さい奴を乗り越そうとした時、後を登つていた岡田がナメに足をとられて滑つた。しかし運がよいことに、中段のテラスに止る。しばらく休んで緊張を解いてから再度登り、やっと乗越えた。どうやら前半の核心はこれで終り、あとは大したことはないさうだと思うとホッとする。水場の沢を分けて右手に入ると小滝が連續し楽しい。右左を適当に揚んでこの辺りは難なくすぎると、谷が二つに分かれた。見たところどうも左の谷の方が立派な感じである。しかしよく周囲をみると、この谷が駒津峰と逆の方に突き上げているのがどうしても気になつたので、地図をみて調べた結果、右手の谷が本谷だと判断した。ヒトラーめいいかげんなことを言うと思ひながら右手の谷を行くと $15 \cdot 6 m$ はあるうと思われる滝にぶつかった。とても正面攻撃できそうにないので右手を大きく高捲いて再び谷に降りると何のことない、本峰がすぐ近くに飛び出した。もう谷をまちがえる心配はない。しかもあとは快適に行けそうだ。六方石を右手に見ながら高度をぐんぐんかせぐ。花崗岩の白い壁が谷の両脇にポツンポツンと並び、その向うには草付の中に花が一杯だ。六方石を下に見る辺りにな

ると意外にも感じの悪いゴルジュが現われた二人とも相当バテている。時間も四時を過ぎていて、ここまで来てやめるのは残念ではあったが無理はやめ、左のスラブの間を乗り越して這松の中に出た。あとは這松を泳ぐようにな抜け、やっと稜線に出た。バテた足取りで本峰に辿り着く。五時をすぎていた。剣の脇に座り込んでリヤンピングを食つた。ここからは心配はないので、ゆっくりと下る。駒津の下りがなんとも辛かったことが思い出される。

余裕のない山行であった。谷そのものは決して困難ではなかつたが、若い二人だけの初めての沢登りであり、余計な緊張がつきまとつた。駒という山は高い山だと谷を登つてやつと実感として受けとつた。パートナーの岡田もそう思つたろう。それにしてもこの相棒は全く心強い奴だ。相棒はどう思つたか知らないが、私はこの時から最も信頼できる山友を得たのである。

戸台川本谷にはもう一つ思い出がある。二年の冬合宿（北鎌尾根）が終えて帰途、原さんと冬の本谷を登ろうと意気込んで谷に入ったのだった。しかしF2まで行って、雪の具合を察して退却したのであった。そう言えばあれ以来駒には行っていないことになる。

一  
完

# 会務報告

て開催する事に決定

## (2) 幹事改選の件

6月末現幹事の任期満了に伴う幹事改選につき、次期幹事候補を選定

幹事会開催

昭和44年5月29日(木)午後7時

場所 如水会館ロビー

出席 山本健一郎、原博貞

中村雅明、佐藤久尚

突然の召集の為、都合の悪い者が多く、4名しか集らず。針葉樹会総会開催および、次期幹事改選についての概略の打合せを済せ、次回の幹事会を6月11日(木)に持つことを決め、その夜は解散した。

幹事長 大賀二郎(36年卒日産自動車)  
会報 倉知敬(38年卒N C R)  
高崎俊平(総務と兼任)  
平川紀男(41年卒富士フィルム)  
会計 池知昭洋(41年卒富士ゼロックス)  
佐藤久尚(41年卒輸銀)  
山行 竹中彰(39年卒興銀)  
学生指導 佐藤之敏(42年卒小松製作所)  
原 博貞(41年卒住友商事)

昭和44年6月11日(木)午後7時  
場所 如水会館ロビー  
出席

(幹事) 山本健一郎、佐藤之敏、平川紀男

斎藤正、佐藤久尚

(会員) 中島寛、大賀二郎、高橋信成

竹中彰

議事

(1) 针葉樹総会開催の件

7月11日(金) 7時より如水会館に

“お願い”

先にお送りしました針葉樹会員名簿にて、住所の訂正等がありましたら恐れ入りますが左記までお知らせ下さい。

東京都千代田区大手町一の五の五

日本輸出入銀行営業オ一部

佐藤久尚

T E L (二七〇) 四三一一

## 編集後記

今号は、高見先輩の追悼をはじめ、古い先輩の方々にも原稿を依頼したが、折悪しく書いて戴けず、結果的に若い会員の方々の寄稿が多くなってしまったのは残念でした。が、高橋さんの「スコットランドの山々」をはじめ、珍らしい記事を御紹介出来たのは幸せでした。

なお、次号からは幹事交代し、この道のペテラン、倉知さんに再登場願うとともに、高崎俊平君(昭41卒・日産自動車勤務)に編集をお願いする事になりました。私もお手伝致します。

何卒よろしくお願ひいたします。(平川) 皆さんの協力で、今回もやっと発刊にこぎつけました。ありがとうございます。未熟と怠慢の故に会員の方々の期待に充分応えられなかつた点反省致しております。地方会員の方々の御寄稿が得やすいよう、今後改善をしていきたいと思います。

(齊藤)



